国立国語研究所学術情報リポジトリ

コミュニケーションについて考える：日本語教育研修室と日本語教育におけるコミュニケーション研究を再考する

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ロラン, マリージョゼ, Lorrain, Marie Josee メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003320

コミュニケーションについて考える

日本語教育研修室と日本語教育における
コミュニケーション研究を再考する

ロラン・マリージョゼ

キーワード

分析能力、批評能力、コミュニケーション科学、コミュニケーション研究

内容

1　コミュニケーションについて考える
2　日本語教育研修室と日本語教育におけるコミュニケーション研究を再考する
日本語教師分析及び批評能力の発達
3　研究の課題の選択：コミュニケーションについての知識の基礎の強化

1　コミュニケーションについて考える

国立国語研究所５０周年記念事業の一環である本稿では、コミュニケーション研究について紹介する。

また、日本語教育研修室及び日本語教育の分野にとってコミュニケーションの理想的姿を維持することが、コミュニケーション、言語、社会の関連の理論的な重要性を強調する手段であることも述べる。

今日コミュニケーションについて考られていることは、コミュニケーション、技術、言語の使用、民主主義の西洋的モデル及び日本において再構築された民主主義の西洋的モデルが産み出す価値との連携である。

例えば、*利害関係及び政治的・科学的イデオロギーがコミュニケーションを阻害するなら、我々は分担と理解が結合した理想的コミュニケーションをいかに維持することができるのだろうか*という疑問がわいてくる。

つまり、コミュニケーションによって適度な距離を保つのは困難なのである。他者と過剰に近づくと、落ち着かない状況になり拒否反応が起こる。また、離れすぎると意見の違いを乗り越えることが困難となるようだ。しかし、いずれの場合も、他者の存在が問題となる。

また、他人とのコミュニケーションを可能にするために尊重すべき状況に関わる問題も起こる。新しい技術を介して、他人が存在すればするほど、争いの源となる状況を回避するために、ある種のルールをさらに尊重すべきである。

これはまた直接体験ではなく、科学的及び内省的な知識によって作られた距離が根本的である理由を説明する。科学的知識は、直接体験をより理解するための助けとなる。これは通俗的なビリーフ（人間にとっての重要性、意識・態度、定義、社会的価値観）がもたらす偏見とステレオタイプを見直すことである。

知識は参考文献なしには生まれない、筆者はコミュニケーションと日本語教育科学の両者を扱った文献一覧（約２５０文献）の作成を試みた。これは、グローバルコミュニケーション研究グループ（以下 GCRG）と称し、日本語教育研修室のインターネットサイトで公開されている。
(http://202.245.103.48/html/rs/communication/index.html)

GCRG のインターネットサイトは以下のものも含んでいる：

１）　コミュニケーション、言語及び社会の関係というテーマを扱った理論的な論文
２）　コミュニケーション、言語及び社会の関係というテーマを扱った方法論的な論文
３）　フィールドワークで用いられる研究方法及び技術についての文献（約５００）

ここで、筆者にとっての「コミュニケーション」を定義すると以下のようになる。

コミュニケーションとは、慣習的行為であり、意味と信頼を融合する過程である。文化人類学、民族誌学、社会心理学、社会学及び歴史学といった学問領域において研究されている。

2　コミュニケーションの視点から日本語教育研修室に新たな姿を再考する：日本語教師の分析及び批評能力の発達

日本語教育研修室に所属する研究者として、またコミュニケーション、言語、社会の関係についての研究プロジェクトに関わる筆者は以下のように考える。

２０世紀の初頭、そして我々が迎えようとしている２１世紀も疑いなく、コミュニケーションは問題を抱えているだろう。すなわち、人間のコミュニケーションと技術的なコミュニケーションの矛盾である。

著しい技術的な進歩の中でも双方は歩みよれる可能性がある。

日本語教育研修室を含む日本語教育においてコミュニケーションの視点からこの問題を見つめ直そうと思う。なぜなら、日本語教育研修室及び日本語教育の現場で以下のことが行われているからである。

１）　日本語教師は日本語を非日本語母語話者に教える
２）　教師と研究者は人間のコミュニケーションの価値観を見出すために問題意識をもって研究及び研修を行う

以上のことは国立国語研究所創立５０周年のための日本語教育研修室の次のテーマと関わることである。

１）　教師のために：《Resources,Research,Reflection&Renewal》
２）　日本語教育のために：《Needs,Neighborhood,Neutrality&Networking》

２１世紀に向けて教師個人、ボランティアのような教師のグループなどで、よりよいコミュニケーションが必要である。そのためには彼らの批評能力、分析能力をつけることが求められる。この仮説を基に研究を進めたい。

3　研究の課題の選択：コミュニケーションについての知識の基礎の強化

現在の筆者の疑問点は以下のとおりである。

どんな状況において、コミュニケーションの側面、人間の最も素晴らしい特徴、つまり他者と関係を持ちたいと思う特徴が維持されるのか。

この疑問の回答を見出すことは困難であり、そのためには次の２つの障害を乗り越える必要がある。

１）　コミュニケーションという用語の混乱

実際、コミュニケーションの概念がいかに広く、混乱しているかをまず認識しなければ、コミュニケーションについて語ることは不可能である。コミュニケーションには多くのことが一度に伴う。それは、言葉であり、意味であり、手段であり、関連であり、社会の要請による専門的な実践である：対人関係は信頼によって見いだされ、情報の透明性を通じた継続的な理解の欠如に対する苦闘である。

そして、コミュニケーションについて、《情報》《メッセージ》《フィードバック》《インプット》《アウトプット》《ブラックボックス》《余剰》《カリキュラム》《プログラム》《記号化》《規則》といった概念によってしばしば混乱が生じる。これらは、道具であってコミュニケーションではない。例えば、人はコミュニケーションのために《情報》を、コミュニケーションのために《メッセージ》を手にする。しかし、コミュニケーションあるいはコミュニケーション科学を活用するためには、それに含まれる適切な理論かつ方法論を用いなければならない。

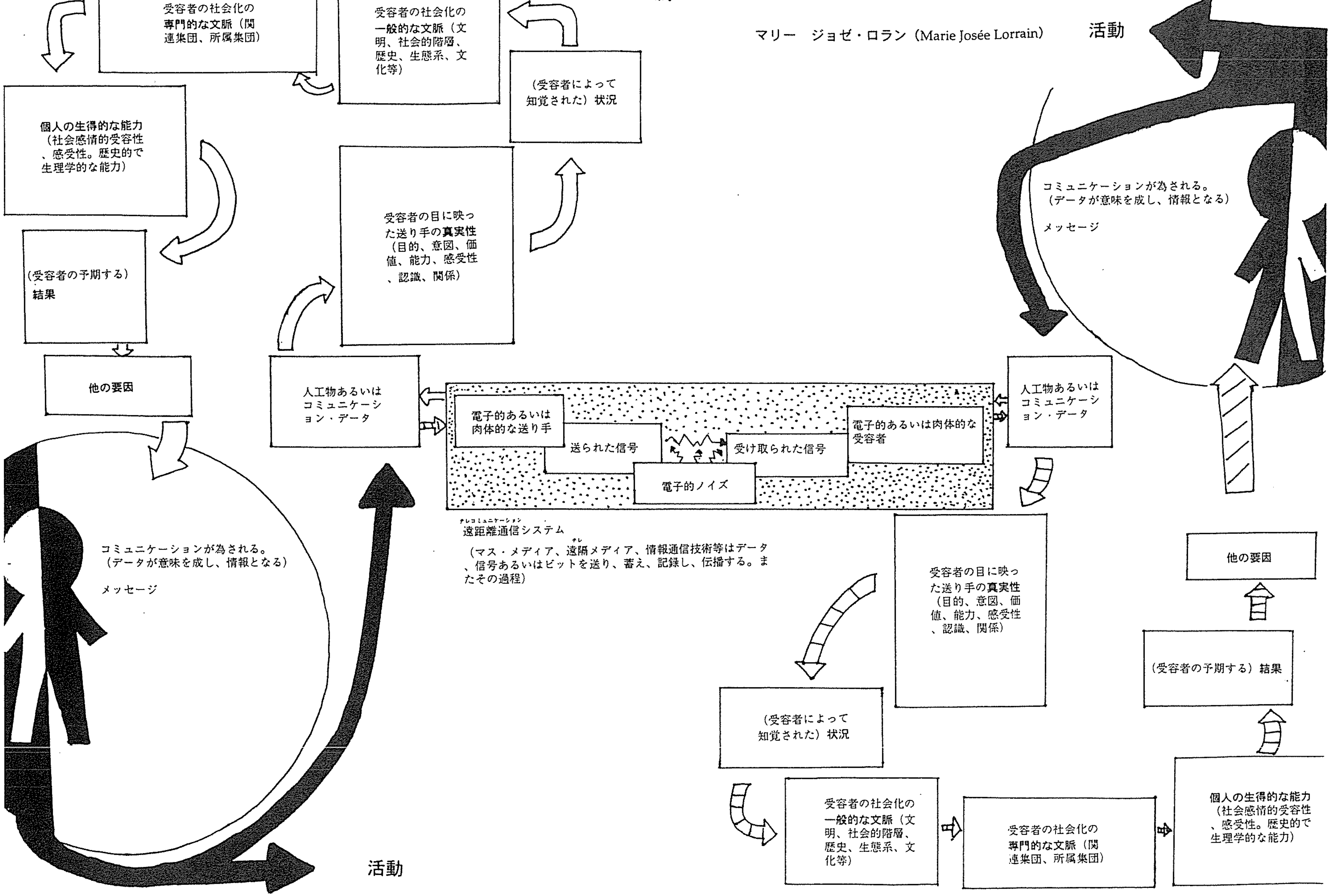
２）　誰もコミュニケーションなしでは生きていけない

誰もコミュニケーションなしでは生きていけない。誰もがコミュニケーションに参加し、コミュニケーションは現実と切り離すことができない。人間は個々の立場　(彼らにとっての重要性、意識・態度、定義、社会的価値観) に基づく、コミュニケーションに参加するので、それは中立的なものではない。

コミュニケーションの概念を通しての《社会的及び言語的な交流》の分析は、異文化間心理学、国際理解、電子メッセージの分析、日本語教育科学などの分野において行われている。しかしその分析は、コミュニケーションを利用している専門家、教師あるいは研究者によって、表面的に行われているのが現状である。したがって、コミュニケーションの背後にある意義及びメカニズムを新たに綿密に再考べき時期が現在であると考える。

グローバルコミュニケーション研究グループ（GCRG）は上記の課題について現在研究を進めている。筆者はこれまでいくつかの「人間コミュニケーション・モデル」の作成を試みた(別紙資料参照)。そのモデルの提示も含めて今後、本コミュニケーション研究が日本語教育研究に貢献できるよう努めていきたい。

謝辞：本稿の翻訳について、Park Kyong Ran 氏、能波由佳氏、野中由紀子氏、山下みゆき氏に大変お世話になりました。深く感謝いたします。

人間コミュニケーション・モデル

マリー　ジョゼ・ロラン（Marie Josée Lorrain）